

2001年度における石碑地遺跡の保存と復元」、同研究員の孫立学氏「恵寧寺について」です。当日は、研究所外から多くの参加者を得ました。普段は目にする機会の少ない中国東北地方における遺跡の調査研究をスライドで見ることができ、充実した講演会となりました。

この講演会は、遼寧省文物考古研究所と奈良文化財研究所が「日中古代墳墓副葬品の比較研究」というテーマで進めている共同研究の一環です。毎年、3～5人程度の研究員がお互いの研究所を訪問し、実際に両国の遺跡を訪れ、遺物を手に取る機会を得ています。講演会は今回が初めての企画でしたが、今後も相互の研究を理解し、公開する場を設けていきたいと考えています。

(平城宮跡発掘調査部 豊島直博)



梁振晶氏による講演

関野 貞の関係資料

奈良文化財研究所は、明治時代の建築史学者である関野貞（1868～1935）の関係資料を所蔵しています。関野貞は奈良県の技師として奈良県の古社寺などを精力的に調査し、現在の奈良の古代建築史学・文化財保護行政の基礎を作った研究者です。また、彼は平城宮・平城京研究の第一人者としても有名で、平城宮第二次大極殿・朝堂院の遺構を発見し、平城宮・京について近代歴史学の立場からはじめて本格的に検討しています。彼の平城宮研究は、学位論文「平城京及大内裏考」にまとめられており、この論文こそが、現在の平城宮・京研究の直接の基礎となっていると言っても過言ではありません。

奈文研所蔵の関野貞関係資料は、彼の日記・原稿などです。これらはご子息の関野克氏が所蔵してきましたが、当研究所が奈良の文化財にたずさわっている縁により、2000年1月に氏より寄贈を受けたものです。

現在その関野 貞関係資料を、文化遺産研究部の歴史研究室が中心となって整理しています。整理してみると、彼が作成した野帳・図面類などに興味深い資料が多くありました。それらは、明治時代における奈良所在の文化財の現状を記録したもので、現在では失われてしまった情報も含まれており、たいへん貴重なものです。

例えば平城宮の現況図は、まだ史跡指定される前の平城宮跡を詳しく記録しています。当時の状況を知る上でも、また、彼の学説形成を知る上でも、またとない資料といえます。

現在、整理作業はまだ緒についたばかりです。今後ここからどんなことが分かるのか、楽しみにしながら少しづつ作業を進めています。

(文化遺産研究部 吉川 聰)



額安寺の明治時代現況図調査風景

研究室紹介

飛鳥資料館・学芸室

飛鳥資料館は、1970年12月「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存等に関する方策について」の閣議決定がなされ、それに基づいて明日香村に設置されることになりました。1973年に当時の春日野庁舎に庶務室と学芸室が発足し、開館の準備に向けて動きはじめ、閣議決定から5年後の1975年に開館の運びとなりました。開館当時の常設展示は、第1展示室のみで「宮殿、寺院、古墳、石造物、万葉集」のコーナー、高松塚古墳の出土遺物を展示した特別コーナーを設けていました。その後、1981年から発掘調査で掘り出された山田寺東回廊の一部を倒壊以前の形で再現展示するための第2展示室の新設が検討されました。1993年から翌年の6月にかけて増改築工事がおこなわれ、後の1996年になって第2展示室に山田寺東回廊が再現され、現在に至っています。

飛鳥資料館では、年に2回、春と秋に定期的な特別展示、不定期に開かれる企画展示を通じて、日ごろの調査研究の成果を公開しています。2002年度は、春の特別展示として、飛鳥地域の飛鳥時代以前の出土物を展示した「あすか以前」を、夏期には企画展示として含水居蔵鏡の代表的なものを展示した「鏡の歴史－含水居蔵鏡の世界－」を、秋の特別展示としては国宝・重要文化財の修理時に作成される保存図を中心とした「A0の記憶－文化財建造物保存図－」をそれぞれ開催しました。学芸室では、このような展覧会の企画立案から展示物の借用および展示方法の検討ならびに図録の編集・執筆をおこなうとともに、飛鳥資料館を訪れた方への展示解説や、質問への対応、所蔵品の貸し出し業務などを主におこなっています。

また、これまでおこなってきた特別展示の図録をはじめとして、日本語、英語、韓国語の3カ国語による飛鳥史ガイドブック『飛鳥資料館案内』を発行するほか、ハイビジョン影像による解説番組「遙かなる飛鳥の時代」「山田寺東回廊」「飛鳥の石造物」「飛鳥の古墳」「飛鳥の宮」をDVDとして、英語、中国語、韓国語の解説付で製作、販売などの普及活動もおこなっています。

(飛鳥資料館 西山和宏)

飛鳥・藤原京展

奈文研50周年を記念して開催している「飛鳥・藤原京展」も、先日東北歴史博物館での会期を終え、現在は最後の会場となる三重県の四日市市立博物館での展示が始まっています(2003年3月9日まで)。

東北歴史博物館では、1万3千人を超える観客が訪れました。飛鳥・藤原地域から遠く離れた東北でも、関心の高さを知ることができました。齊明天皇は、服属を確認させるために、盛んに蝦夷の賓客を招いて饗宴をしていました。その饗宴の場からは、石人像や彼らが持ち込んだ土器が見つかっており、東北での展示の目玉として話題を集めました。

現在開催中の四日市市立博物館では、「飛鳥・藤原京展」の関連行事として、館独自で制作した「キトラ古墳と冬の星座」というプラネタリウム番組を投影しています。星空を見上げながら飛鳥・藤原時代に想いを馳せる…。一人でも多くの方にこのロマンを感じていただきたいと思っています。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 前岡孝彰)

河合隼雄文化庁長官が奈文研を視察

平城宮跡解説ボランティアと懇談

2002年10月24日、河合長官は解説ボランティア50有余名と懇談をされました。出席者から、復原建物を始め120haの広大な公開活用と来訪者へ最適な環境を提供するためには、自らの知識の向上とともに資料館展示物の更新、わかりやすい案内板の設置、ゴミ等を投棄させない工夫、また、京奈和道路、近鉄電車の問題や博物館相当施設への充実が必要と提案がありました。

河合長官から、次のお話しがありました。平城宮跡解説ボランティア事業は、文化庁「ボランティア通信第1号」でも高く評価し活動を紹介していますが、解説ボランティアの必要性と在り方については、何事も活動を通して、皆様の思いを満たすことが大切で、国、自治体、地域の理解と共通認識があったうえで、ボランティアと行政が、連携協力しその度合いを高めていくことも必要と説明がありました。さらに、活動を通して文化の振興のためには、今後も皆様の責任の範囲で協力と活動をお願いしたいが、これまで以上の満足感を得るためにには、皆様が現在の知識で解説するだけではなく、お金を払ってでも積極的な学習を展開し活動に参加して欲しいとの激励がありました。

(管理部文化財情報課 大山達夫)



ボランティアとの懇談風景